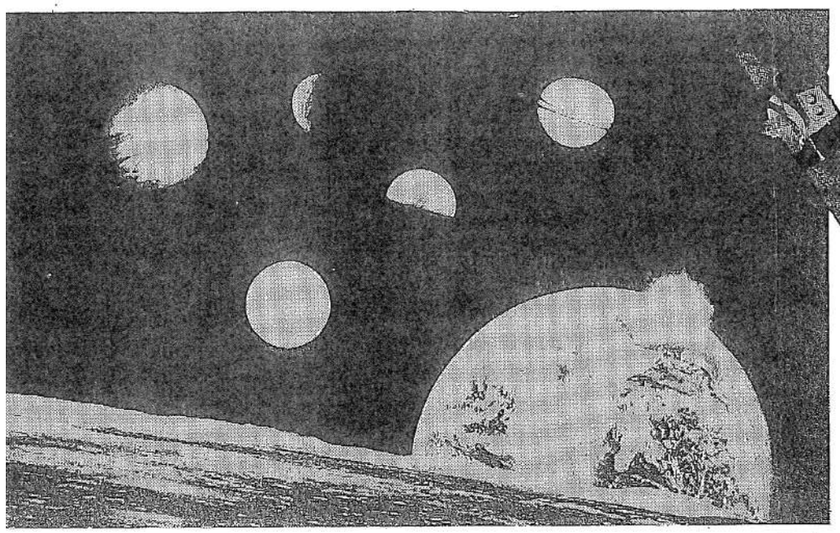
地球は神のもの
すべての被造物のもの
日本カトリック司教協議会社会司教委員会メッセージ



初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ」こうして、光があった。（創世記1・1～3）

左の写真は、米航空宇宙局が作成した合成写真で、月面に大きく昇り始めた地球（右）と他の五つの惑星。地球の左は金星、その上は左から木星、水星、火星、土星、人工衛星

自己中心的生き方 捨てよ
環境問題解決に犠牲必要

社会司教委員会（委員長・佐藤千敬司教）は、さきごろ『地球は神のもの、すべての被造物のもの』という環境問題についての次のようなメッセージを発表した。同メッセージは、創世記一章二十八節（本文三段目―4行）について教会の中でも、かつて自然界のすべてを人間の意のままに用いてよいという根拠であるかのように考えてきたきらいがあったことにも反省、環境問題は、私たちの信仰そのものを問うものであり、これによって神の創造の本来の意味を問いなおすことが大事だとしている。

はじめに

環境問題は、オゾン層破壊や地球温暖化現象のように、いまや一国だけで解決できる問題ではなく、全地球的、さらに宇宙的な問題としてとらえなければならない状況になっており、いろいろな分野で国際規模の研究や活動が進められています。教皇ヨハネ・パウロ二世も、一九九〇年の「世界平和の日」のメッセージを環境問題に的をしぼり、『創造主である神とともに生きる平和、創造されたすべてのものとともに生きる平和』と題して発表しました。これは、世界の平和も環境問題と切り離しては考えられない時代になっていることを示すものです。

すでに皆さんの中には、自分たちの生き方そのものにかかわる重大なこととして、この問題に真剣に取り組んでいる方がたくさんおられます。私たち司教はこのような方々と心をひとつにして、日本のカトリック教会全体がこの問題と取り組んでいく必要性を実感しています。

信仰そのものにかかわる問題として

環境問題にはさまざまな角度から取り組むことができますが、私たちキリスト者は、これを信仰そのものにかかわる問題としてとらえる必要があります。

神は、一つひとつの被造物がご自分の姿を映し出すよう、すべてを「善いもの」として造り、人間の手におゆだねになりました（創世記一～2章、ローマ1・20参照）。しかし、人間は、それらを自分たちのほしいままに利用し、価値づけてきたのです。

カトリック教会の中でも、霊的な世界の価値を強調するあまり、人間以外の生物やその他の被造物の本来の価値を過少評価し、聖書にある「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」（創世記1・28）ということばを、創造主である神の協力者となるようにという呼びかけとしてではなく、あたかもすべてを人間の意のままに用いてよいという根拠であるかのように考えてきたきらいがあります。

確かに神は、全被造物の完成を目ざした開発を人類の手におゆだねになりました。しかし、私たちは、これまで神の創造のみ業への参加を真剣に考えず、より豊かで便利な生活を進歩とみなし、留まるところなくそれを追求してきました。その結果として人間は、自らが作り出した化学物質や放射能の危険に常にさらされ、不安のうちに生活しなければならなくなってしまいました。また、実際に公害によるさまざまな病気や障害に苦しんでいる人びとも少なくありません。大気、大地、河川、海岸は汚染され、生態系はこわされ、農業者・漁業者また森で生活している人たちは、次第に生きる手段を奪われています。さらに心に留めなければならないことは、先進工業国は先に自分たちが味わったこれらの苦しみを今は南の国の人びとに押しつけているという事実です。私たち人間は、「乱開発」ということばでは表現し尽くせないほど、他の人たちの生活、文化、生命までも脅かし、神がそれぞれの被造物にお与えになった本来の豊かさと秩序を破壊するまでに至ったのです。そしてこの秩序破壊は、単に物質の世界だけではなく、人間環境、たとえば家庭環境・教育環境といった人間の心の世界にまで及んでいるのです。

したがって私たちは、この環境問題に直面するとき、私たちの信仰そのものが問われていることを意識し、過去を振り返り未来を見つめながら、神の創造の本来の意味を問い直すことが大事だと思います。

神のことばに心を開いて

聖書には、これからの私たちの歩むべき道を指し示すことばがいくつも見出されます。たとえば、詩編作者は、「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの」（詩編24・1）ということばで、万物の所有者は人間ではなく、神であることを宣言しています。そしてレビ記の著者は「あなたたちはわたしの土地に寄留し、滞在する者にすぎない」（レビ25・23）という神のことばを記して、自然環境や資源に対する私たちの取るべき姿勢についての示唆を与えています。さらにパウロは「被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子どもたちの栄光に輝く自由にあずかる」（ローマ8・21）と、被造物とのかかわりの中で私たち人類の救いは完成することを教えています。

私たちは、このような神のことばに耳を傾け、神によって造られたあらゆるものとの調和を保つ開発、発展を心がける必要があります。そのためには私たち自身が、個人として、グループとして、企業および国家としての自己中心的な考えや生き方を捨て、これまでの便利さ追求型の生活様式や社会構造を変えることも辞さないという、大きな犠牲を引き受ける覚悟を持たなければなりません。私たち自身の回心が環境問題の解決への道を見い出すための条件だからです。

私たちがこの環境問題の根本的な解決への道を歩み始めることができたとき、民族問題や南北問題などの解決の道もきっと見出されることでしょう。そして、文字どおり、全被造物が「全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ、歓声をあげ、喜び歌い、ほめ歌え」（詩編98・4）という詩編作者のことばに合わせて、よろこびのシンフォニーを奏でることができるようにしよう。

みんなで協力し合いながら

環境問題の広がりと深刻さを見ると、その解決には世界規模の取り組みと専門的、組織的な研究協力が必要なことは明らかです。しかし、なにより大切なのは、私たち一人ひとりの市民レベルの努力でしょう。事実、ほとんどの運動の第一歩はそこから始まっています。これまでこの問題に取り組んでこられた方々の努力を励まし、祝福したいと思います。環境問題に取り組む人たちの保護の聖人であるアシジのフランシスコの取り次ぎを願いながら全被造物の完成に向けての歩みを、すべての善意の人たちとともに、みんなで続けていきましょう。

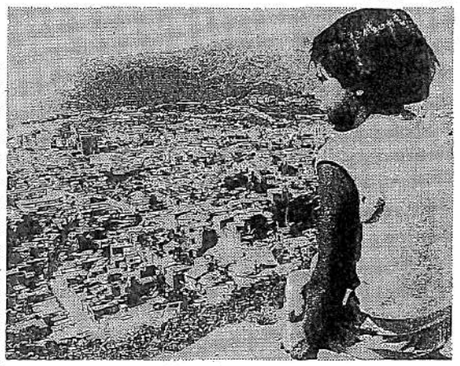
今回は、信仰の視点に立って、環境問題に対する教会の基本的姿勢を皆さんにお伝えすることを意図しました。今後も聖書の読み方、信仰者としての在り方、問題への具体的取り組みなどを皆さんとともに深め合いながら、神の国の完成への歩みをともに進めていきたいと願っています。

万物の創造主である神がこれからの私たちの歩みを導いてくださいますようにと祈りつつ。

一九九二年十月四日
アシジの聖フランシスコの記念日に

日本カトリック司教協議会
社会司教委員会

▲傷ついている地球を支えるギリシャ神話のアトラス。地球が喘いでいるようにもみえる＝地球サミット'92のポスターから



▼都市化とともにすすむ自然破壊、子供の心もすさぶ

環境問題メッセージについて

阿野　武仁

このたび、社会司教委員会から『地球は神のもの、すべての被造物のもの』という環境問題に関するメッセージが発表されました。すでに日曜日のミサの中で朗読された教会もあることと思います。

この原案は、実は「社会福音チーム」という第一回福音宣教推進全国会議の答申に応えて司教団がまず最初に作ったプロジェクト・チームによって作成されたものです。

このチームは、まずマイノリティ問題と取り組み、昨年の十一月に『ともにだれと・・』（上・下巻）という小冊子を発刊しました。その後すぐに、この環境問題に関する文書に取り組み始めましたが、どのような角度から捉えるかということで何度も検討が行われた末、これまですでにこの問題と取り組んでおられる方々の活動を司教様方も認め、感謝していることを公表する必要があるし、今後の活動を励ます内容の文書にしたいという結論になりました。

「今さら環境問題など」という意見もあった中で、「今になって、やっとカトリックも……」でもいいかなー」と言えるような内容のものにしたいということで「信仰の視点に立って環境問題を考える」ことを主眼にした文章が作成されることになったわけです。

神学的な研究は神学部を持つ大学にすでにお願いしてありますが、本格的な取り組みは、さまざまな分野でこれからともに始めなければなりません。今回の文書では、そのことを「今後も聖書の読み方、信仰者としてのあり方、問題への具体的取り組みなどを皆さんとともに深め合いながら、神の国の完成への歩みをともに進めていきたいと願っています」という表現で、最後のしめくくりの部分に述べているわけです。

この文書は、まさにカトリック教会全体の環境問題への取り組みの第一歩を促すためのアピール文であり、それぞれの分野の研究・活動の成果を取り入れた全国民を対象とした本格的な文書は、数年後にならなければ発表することはできないでしょう。

一般市民の共感期待

もちろん今回の文書も、全国民に理解できる内容に工夫され、一般市民の共感を得られることも希望しながら作成されています。環境問題は、市民レベルの活動に発展しない限り、本当の解決には至ることができないからです。ただし今回は、教会外への配布は控えて、『カトリック新聞』紙上での発表を通じて一般の人びとにも知っていただくという方法をとることになりました。希望者はだれでも、この文書のコピーを送ってもらえることになっています。

ところで、この文書のコピーが各小教区へ送られた直後に、一部訂正すべき個所が見つかり、急きょその訂正文が再送付されましたので、十月四日の日曜日に訂正前の文章のままで朗読された小教区があった可能性もあります。この場をお借りして、心からおわび申しあげます。（社会司教委員会秘書・あのたけひと）

お願い　この文書に関するご意見や皆さんの研究・活動結果のご報告などは、カトリック中央協議会内・社会司教委員会宛にお寄せください。この文書（A4用紙3枚）はさきに小教区司祭に配付しましたが、入手ご希望の方は、62円切手を貼った返信用封筒を同封して中央協事務局のため十二月一日以降、左記にお申し込みください。

〒106東京都港区麻布潮見二の十の十
日本カトリック会館内　社会司教委員会